

# 2016年度 九州大学 前期 国語

## 一 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	30分	檜垣立哉『賭博／偶然の哲学』からの出題。檜垣立哉は日本の哲学者。文学博士（大阪大学）。大陸哲学およびフランス現代哲学や日本哲学（主に京都学派）に関する研究を精力的に行う。専門は、生命論、応用倫理学、生命倫理学。大阪大学大学院人間科学研究科教授。埼玉県出身。著書に『哲学者、競馬場へ行く 賭博哲学の挑戦』等がある。	本文は決してやさしくはないが、設問自体はやや易く標準程度のもが多かったと思われる。また、解答欄が広めにとられているのでのびのび解答できただろう。 問1、問2はそれぞれ第1・第3段落を読み解けばほぼ解答できる。問3はやや難しいが、ここまでの筆者の主張を理解しそのうえで第5段落を冷静に読み解けば解答できるだろう。問4～問7はさして難しくはないものの、解答の仕方に指定があるのでそれに即して内容をまとめるよう注意したい。問7の漢字問題は③と⑤がやや難しかったかもしれない。

### 解答

- 問1 本人の責任が追及されるには、ある程度民主主義と資本主義が成熟し公正性が確保され、個人が自由に行動できる社会でなければならないから。(65字)
- 問2 かつては地震や津波といった天災を予測する技術がなかったため、その被害は人間の努力によって食い止められるものではなく、個人の過失による人災とはみなされなかったから。(81字)
- 問3 人間の自由は、常に進化する自然において偶然与えられた身体に完全な制御が不可能なまま関わることを前提とする以上、結果の予測のできない賭けとしてしか現れないということ。(82字)
- 問4 社会において私が行為することと、自然においてテクノロジーを用いることについて、その結果を予想することが原理的にできないということ。共通点があるということ。(74字)
- 問5 現在の私たちの価値水準に照らして許容された科学技術を利用したとしても、生物は進化し変わるのだから、未来に生きる人々が私たちと同様の価値判断を下すとは限らないという構造。(84字)
- 問6 リスクの管理や結果の予見はそもそも不可能であり、個人の責任など追及できないと了解することで、それに対する不安を紛らわせるためかえって強く自己責任論を展開しているということ。(86字)
- 問7 ① 絡(む) ② 顕著 ③ 翻(って) ④ 絞(り) ⑤ 隠蔽

## 本文解説

## 段落解説

## I 「自己責任」の喧伝(第1〜第4段落)

近年の社会では、「自己責任」というものが至る所で喧伝されるが、これは社会がリベラルになっているということの意味していると筆者は述べる。なぜなら、もし個人の行為が制限され、公正でない社会であったならば、個人の行為の責任など追及できはしないからである。同様に、科学技術が進歩することで、技術的に可能である行為の範囲が広がり、今まで誰も責任など負えなかったことについて責任が生じるようになった。このように、人間が「自由」であるとされる範囲は社会や科学技術の進展に大きく依拠しており、その範囲が広がるにつれ「自己責任」が問われる範囲も広がるのだ。

## II 行為するという賭け(第5〜第7段落)

筆者は、(I)のような状況を踏まえたくうえで、人間が自由であるということのさらに本質的な意味を探っていく。自由であることは個人に無前提に備わっている性質ではない、と筆者は考える。何かを決断する時に限り、その意志という形で自由は現れるが、その決断により生み出された行為の結果は、私という存在者には到底予見できない。それは、例えば私の行為が他者にどう受け止められるかわからないように、社会という大きな潮流は私という個人には測りきれないことによる。そして、自然のテクノロジーについてもやはり同様で、我々は我々が用いたテクノロジーの未来に及ぼす影響を予測することはできない。これは、未来に生きる存在者が我々と同じ価値判断をするかわからないからである。結局、我々は自分の行為の結果を予見するに足る何か絶対的な根拠はもっておらず、この意味で我々の行為はどこまでいっても賭けなのである。

## III 自己責任論という病理状態(第8段落)

(II)で述べられたように、行為というのはどうしても賭けであると筆者はいう。にも関わらず、リスク管理化された社会では、結果の予見が不可能であることを前提としながら、責任が限りなく賭けに近いという不安を隠蔽するかのようになり、逆に強く自己責任論が展開される。これは典型的な病理状態であると、筆者は締めくくる。

## 百字要旨

社会がリベラルになり多くのことが技術的に可能になった近年では「自己責任」というものが大きく喧伝されるが、人間は行為の結果を予見することはできず、行為とは本質的に賭けであるので、これは病的な状態である。

(100字)

## 用語解説

— 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

**喧伝** けんでん 世間に言いはやし伝えること。**デモクラシー** 民主主義。**リベラル** 個人の自由、個性を重んずるさま。自由主義的。**僭越** けんえつ 自分の身分・地位をこえて出過ぎたことをすること。そういう態度。

## 設問解説

## 問1

**解答** 本人の責任が追及されるには、ある程度民主主義と資本主義が成熟し

公正性が確保され、個人が自由に行動できる社会でなければならぬ

から。(65字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I (第1～第4段落、特に第1段落)

**解説**

第1段落に書かれてある内容でほぼ解答できる。

傍線部直後の一文に「社会が自分にとって全くどうしようもなく、自分がそこに何かを働きかけうる場ではないならば、そこでは責任など生じようがないからだ。」とはつきり理由が述べられており、この部分の内容を中心にまとめれば解答になるだろう。また、これに続く文は逆説の「しかし」から始まり、「ある程度ではあれ民主主義が成熟し、ある程度ではあれ公正性が確保された社会が形成されれば、そこでの自分の行為について、限りなく責任が問われる可能性が生じてくる。」とあるので、前文の「責任など生じようがない」「社会」の反対(＝責任の生じうる社会)は、「ある程度ではあれ民主主義が成熟し、ある程度ではあれ公正性が確保された社会」であるとわかる。このような社会は、「自分にとって全くどうしようもなし」のものではなく、「自分がそこに何かを働きかけうる場」であり、つまりは各人が自由に行動できる(＝リベラルな)社会なのである。そして、このように自由に行うことができる社会では、人々は自分の行為に責任を持たなければならなくなるし、逆に「リベラル」な社会でなければ自己責任というの追及できないのである。以上の内容をまとめ、解答を得る。

補足しておく、第1段落の後半にあるような「ある程度以上に」リベラル化が進んだ社会においては、「情報」が「充分すぎるほど与えられて」おり、行為の結果は「予見可能」であるとみなされるといふ内容は、「責任」が「コントロールの範囲内を逸脱してしまう」条件であって、自己責任が追

及されるための条件ではない。そのため「自己責任が追及されるには、行為の結果を十分予測できるほどの情報がある社会でなければならぬから。」といった書き方をしてしまうと誤りになってしまうので注意したい(「自己責任」の前に「際限なく」といった修飾があれば本文の内容に反しないが、傍線部の理由説明としては不自然になってしまう)。

《解答要素》

- ① 「自己責任が追及されるには」
- ② 「ある程度民主主義と資本主義が成熟し公正性が確保され」
- ③ 「各人が自由に行動できる社会でなければならぬ」

《参照箇所》

- ① 第1段落3文目
- ② 第1段落4文目
- ③ 第1段落3文目

問2

**解答**

かつては地震や津波といった天災を予測する技術がなかったため、その被害は人間の努力によって食い止められるものではなく、個人の過失による人災とはみなされなかったから。(81字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 一般化型

解答範囲 I (第1～第4段落、特に第3段落)

**解説**

第3段落においてある程度具体的に述べられている内容を一般化して説明すればよい。第2段落において「科学技術の進展」が「社会の進展と同じ

くらい」人間の責任の追及に影響するということが述べられている。「社会の進展」により「自己責任」が要求されるようになる過程は問1で確認した通りである。そして第3段落では具体例として地震や津波の例が挙げられる。傍線部直前で述べられているように、科学技術の発展により「断層が可視化」されたり「津波の予想」ができたりするようになると、「津波を予知できなかったこと」「計器がそんなに巧く働かなかったこと」「誰かがさぼっていたこと」などが責任追及の対象となる。つまり、技術の発展により人間の努力不足が責められる対象となったのである。しかし、そんな技術が存在する前は、誰にも天災は予想できないのだから「誰かが責任をとること」はあり得なかったというのが傍線部の内容である。以上をまとめれば解答になるだろう。内容はそれほど難しくないため、いかにうまくまとめられるかが鍵となる。

#### 《解答要素》

- ① 「かつては天災を予想する技術が存在しなかったため」
- ② 「人間の努力によって被害を食い止めることはできなかったから」

#### 《参照箇所》

- ① 第3段落4文目
- ② 第3段落6文目

#### 問3

#### 解答

人間の自由は、常に進化する自然において偶然与えられた身体に完全な制御が不可能なまま関わることを前提とする以上、結果の予測のできない賭けとしてしか現れないということ。(82字)

難易度 ★★☆☆☆

#### 設問パターン 一般化型

解答範囲 I (第1～第4段落、特に第3段落)

#### 解説

第1～第4段落までの内容を踏まえたうえで、第5段落を読み解きそれを傍線部直前の内容を中心にまとめればよい。

第4段落では、本文のここまでのまとめとして、人間の自由とは人間に内在するものではなく「社会体制」や「技術水準」の影響を受けるものであるということが述べられている。第5段落では、「何かを試みるとき、何かを決断するとき」「漠然たる意志の一撃のようなものを感じうる」一方で、しかしそれは「ほとんどどうしようもない流れのなかに何かを投げ込んでみることでしかない」のではないかと述べられる。「ほとんどどうしようもない流れ」とは、例えば先に述べた「社会体制」や「テクノロジー」、また第5段落で述べられている「自分の身体」に関するものだと思われる。人間は「自分の欲動や情動を、そんなに制御できるわけではない」し、身体能力も「生物学的な制約(すなわち人間の限界)やその個人的な能力」に「規定されている」という意味で、「自分の身体を十分にコントロールできるわけではない」と筆者はいふ。手足を動かすといった日常的な動作の範囲でも「身体の有効な使い方」を習得しなければならないのだが、そのためには「歩くのを覚え泳ぐのを習う」「ダイエットして身体を絞る」といった形で自分の身体に働きかけなければならない。しかし、常に自然は進化するのだから、その自然において与えられた人間の身体も当然進化し、その過程でたまたま与えられた自分の身体に働きかけること、これはその結果が本来的に予測できないという意味で「賭け」である。

以上が傍線部直前までの内容であり、傍線部中の「そのかぎり」とは傍線部直前に書かれてある通り、「偶然的」に与えられた「この身体」に働きか

けるという「賭け」を行う際にかぎりということである。結局、人間の自由というのはこの賭けを行うという「漠然たる意志の一撃」としてしか現れず、その後は「ほとんどどうしようもない流れ」に任せるしかない、というのが筆者の主張である。以上をまとめて解答を得る。

#### 《解答要素》

- ① 「人間の自由は、常に進化する自然において偶然与えられた身体に」
- ② 「完全な制御が不可能なまま関わることを前提とする以上」
- ③ 「結果の予測のできない賭けとしてしか現れないということ」

#### 《参照箇所》

- ① 第5段落17文目
- ② 第5段落9文目
- ③ 第5段落17文目

#### 問4

**解答** 社会において私が行ふることと、自然においてテクノロジーを用いることについて、その結果を予想することが原理的にできないということと、共通点があるということ。(74字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 II (第5〜第7段落、特に第6・第7段落)

#### 解説

第4段落1文目で述べられている内容の具体的な説明が求められている設問である。

問題文にはっきりと「何と何に、どう」という共通点があるというのか、説明

せよ」と書かれてあるので、まずは「何と何」についての設問なのか考えていくのが自然だろう。傍線部に「自然のテクノロジーにおいて」とあることから「何と何」の一方が「自然のテクノロジー」に関係することは明らかである。もう一方は、傍線部前段落(第6段落)をみれば明らかのように「社会」における個人の行為についてだろう。「何と何」の内容がわかったので、あとは「どう」という共通点があるのか考えればよい。

まずは第6段落の「社会」についてみていこう。「個人が自立し、個人の自由な判断がとりあえず尊重されている」「リベラルな世界」においては、たしかに「私」は自由に行うことができる。しかし、このような社会においても、「私」が何かをなすこと」が「他人にどう受けとめられるのか」は結局わからない。このように(他者の考えについての)「絶対的な根拠」が存在しないにも関わらず社会において行為することは「何処までいっても賭けである」と筆者はいうのである。

次に第7段落の「自然」についてみていこう。傍線部直後において、「遺伝子に関する知見」や「環境についての議論」がどんなに拡張・展開しても、「ある時間枠のなかでしか生きられない私たち」には「自然に投げ込んでいったテクノロジーがどのように跳ね返ってくるのか」わからないということとが述べられている。この内容が第6段落の内容とどのような共通点を持つのか考えていくと、結局人間は自分の行った作用の結果を「原理的に」予想することができないという点が共通していることがみえてくる。さらに具体的に言えば、「社会」における私の「行為」がどのような結果をもたらすのか知れないということと、「自然」に対して用いた「テクノロジー」がどのような影響を及ぼすのか測りえないということが「同様のこと」とであるといわれているのである。以上の内容を設問に即する形でまとめれば解答となる。

《解答要素》

- ① 「社会において私が行為することと、自然においてテクノロジーを用いることについて」
- ② 「その結果を予想することが原理的にできない」という共通点があるという点と。

《参照箇所》

- ① 第6段落3文目、第7段落2文目
- ② 第6段落4文目、第7段落3文目

問5

解答

現在の私たちの価値水準に照らして許容された科学技術を利用したとしても、生物は進化し変わるのだから、未来に生きる人々が私たちと同様の価値判断を下すとは限らないという構造。(84字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型+指示語説明型

解答範囲 II (第5〜第7段落、特に第7段落)

解説

傍線部内に「この」とあるので、指示先を見つければ解答となる。

定石通り前文を見てみれば、「生物は進化し変わるのだから、そうした未来の他者にとって、現在のわれわれの水準での価値判断が当てはまるかどうかは誰にも何もいえない。」とあり、「この構造」とはまさしくこの内容である。傍線部直後の「下敷き」しているはずだ」という表現がわかりにくいのが、次段落1文目に「リスクの回収や結果の評価がそもそも不可能であることを前提としながら」とあることなどから、結局傍線部を含む一文で述べられて

いるのは、環境問題等を考えるにあたり、未来の人間が現在の人間と同じ価値判断をすらかわらないということである。以上を踏まえ、「生命環境テクノロジーの問題」が「下敷き」している(前提にしている)構造を設問に即してまとめればよい。

《解答要素》

- ① 「現在の私たちの価値水準に照らして許容された科学技術を利用したとしても」
- ② 「生物は進化し変わるのだから」
- ③ 「未来に生きる人々が同じ技術に対し同じ価値判断を下すとは限らない」という構造。

《参照箇所》

- ① 第7段落5文目
- ② 第7段落5文目
- ③ 第7段落5文目

問6

解答

リスクの管理や結果の予見はそもそも不可能であり、個人の責任など追及できないと了解することで、それに対する不安を紛らわせるためかえって強く自己責任論を展開しているということ。(86字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 III (第8段落)

解説

「ここまでの本文の内容を踏まえながら、「逆説的」とはどういうことか考

えていく。傍線部付近の言い換えに着目しつつ、読み解いていく。

第8段落冒頭で述べられている通り、いくら社会がリベラルになっても、またいくら科学技術が進歩しても、物事の責任は「限りなく賭けに近いものである」というのが筆者の「ここまでの主張である。そうであるにも関わらず、現代社会では『自己責任』ということが至る所で喧伝される」(第1段落1文目)というのが本文の主題だろう。第8段落を見てみると、世界は「そのことについて個人が責任をとることなどとてもできないある種の賭けから成り立って」おり、人々は「自己の行為」は「何にも支えられていない」ということを「少なくとも無意識的には」了解しながら「も、その「不安を隠蔽したいかのように」「逆に強く自己責任を語りたがる」と述べられている。これらは傍線部の言い換えであり、「このことを筆者は「逆説的」であり「倒錯的」である」といっているのである。これをまとめれば解答となる。

以上のように、傍線部付近において傍線部の言い換えを探す作業は読解の基本であるのでおさえておきたい。

《解答要素》

- ① 「リスクの管理や結果の予見はそもそも不可能であり」
- ② 「個人の責任など追及できないと了解すること」
- ③ 「その不安を紛らわせるため逆に強く自己責任論を展開しているという」

《参照箇所》

- ① 第8段落1・3文目
- ② 第8段落1・3文目
- ③ 第8段落4文目

問7

解答 ① 絡(む) ② 顕著 ③ 翻(って) ④ 絞(り) ⑤ 隠蔽

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

①、②、④は「落とすと差をつけられてしまう問題」、③、⑤は「取れると差をつけることができる」問題だったといえる。「たかが漢字」と思わず、漢字の書き取りで点数を取りこぼすことのないように対策しておこう。

(島田了輔、丸岡賢人、井小路馨)

# 2016年度 九州大学 前期 国語

## 二 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	30分	古井由吉『「時」の沈黙』からの出題。古井由吉は昭和後期から平成の小説家で、東京大学大学院独文科を卒業。立教大学などでドイツ文学の教鞭をとったのち文筆活動に専念するようになり、1971年「杏子」で芥川賞を受賞。1970年前後に登場してきた、個人の内面を描く作風を特徴とする「内向の世代」を代表する作家である。	第一問と同様に本文はやさしいものではなく、またやや婉曲的な言い回しが多いため、科学技術についてある程度教養がないと読みづらかったかもしれない。このように、現代文では出題テーマについての知識の有無が本文理解を左右することがあるので、テーマ学習も怠らないようにしたい。 各設問について、全体的に解答範囲が狭く、傍線部付近をおさえるだけで解答できるものが多数であり、特に問1や問3は平易だったろうと思われる。問2や問4、問5は婉曲的・比喩的な表現を説明させるもので、本文の該当箇所を述べられていることがしつかり理解できていないと難しかった。

傾向と対策
たであろう。問6は本文の結論部分にあたり、本文全体の内容を踏まえて、結局筆者が科学技術について述べたかったことが問われている。問7は漢字問題で、全体的にやや難しい語句が出題されている。

### 解答

- 問1** 社会において労働力となり活躍する壮年たちよりも、すでに引退し何もしない高齢者が尊重され、特別に扱われているから。(57字)
- 問2** 最先端の技術を追い求め、志向する近代的な先進都市では、若い世代はその進歩の速度に追行できず、人間も未成熟な状態であることが評価されるようになり、人は若く軽快で活動的に見られることを願うようになったということ。(104字)
- 問3** 科学技術の進歩により、さまざまな病気の療法や薬品の開発が進むことで幸運にも病から救われた人々が感じる、それらが開発されるまでのわずかな時間の差で生き永らえることができなかつた人々に対するうしろめたさ。(100字)
- 問4** 近代の科学的な世界観に即して考える人間(19字)
- 問5** 先進近代社会を生きる人間は、科学的な世界観にもとづき魂の不死という観念を排除し、そのようなものに頼ることなく社会を営んできたということ。(68字)
- 問6** 科学技術は、限定された領域の中での追及を繰り返し発展していくものであり、個々の技術は短期間のうちに更新されていく本来有限かつ相対的なものである点と、一方でその限定の更新と展開の無制限からあたかも永続するものかのように考えられていることが矛盾し

ている。(127字)

- 問7 ① 悠然 ② 虐殺 ③ 累々 ④ 穏当 ⑤ 干涉

**本文解説**

**段落解説**

**I 近代の「不老」(第1～第4段落)**

二十世紀を特徴づけるものとして、老病死の排除が挙げられると筆者は述べる。それは老若の価値観にも影響していて、二十世紀の初頭には人は若くて軽快で活動的に見られることを願うようになったのだという。それに伴い老年が尊重される伝統は空洞化し、人々の経験の積み重ねも数十年のうち時代に取り残され、ほとんど役に立たなくなる。このような状況を筆者は、近代は「不老」である、すなわちつねに先端であり成熟することがない、いつまでも新しい時代であると述べる。

**II 人の生死と近代の「不死」(第5～第8段落)**

科学技術の進歩により、さまざまな疾病が克服された。その進歩の勢いはすさまじく、数年前なら救われなかった病氣から救われた人々は、治療法の開発以前にその病氣で死んだ人々に対してうしろめたさを覚えるかもしれないと筆者はいう。このような医療技術の発展の一方で、二十世紀には多くの人命が奪われた。結局近代は人を死に追いやるのだが、近代そのものはいつまでも新しく、「不死」の相貌を帯びている。近代の雰囲気にもれた人間は、近代の科学的な世界観に即して思考するが、ただ一身の生死のことになると魂の観念を持ち出さずに自分を自分として捉えるのは難しいのではないかと筆者は述べる。

**III 科学技術の「不死」(第9～第12段落)**

「私」を維持するためには必要不可欠であるように思われる魂という観念は、それ自体不死という観念を含む。例えば、魂というものは人間の寿命を超えて存在し得るという意味で、ほとんど不死である。この不死という観念は、近代の科学的な考え方にもとづく社会において、もはや無用の存在であり、実際そんなものはとうに清算して社会を営んできたかのように思われるが、(魂という観念が未だ必要不可欠であるのと同じく)実はそうではない。社会を構築するにあたり、不死の観念は永続という観念に姿を変え、さまざまな事物や営為の底へ入り込んでいるのである。そして現実主義の支配のもとでは、不死の観念は科学技術の中へ潜り込んだのだが、ここには矛盾がある。なぜなら、個々の技術は短期間に超えられていくもので、科学技術の発展は有限で相対的なものの積み重ねであり、不死とは程遠いからである。しかし、その有限の追求が無限に展開していくように思われるがゆえに、科学技術は不死の相貌を帯びているのである。

**百字要旨**

二十世紀では科学技術の発展により老病死が排除され、人々の老若の価値観も逆転し、近代とは常に先端であり不死のようだ。これは、科学技術の発展は本来有限的である一方で、その展開が無限であるがためなのである。(100字)

**用語解説**

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

**巻 世間**

**原理** ものの拠って立つ根本法則。認識または行為の根本にあるきまり。

他のものがそれに依存する本源的なもの。世界の根源、ある領域の事の根本要素。

**踏躑** 足もとのたしかでないさま。よろめくさま。

**設問解説**

**問 1**

**解答** 社会において労働力となり活躍する壮年たちよりも、すでに引退し何もせず過ごす老年が尊重され、特別に扱われているから。(57字)

**難易度** ★★☆☆☆

**設問パターン** 理由補填型+指示語説明型

**解答範囲** I (第1〜第4段落、特に第1・第2段落)

**解説**

第2段落の内容から、それがなぜ「特権」なのか、すなわちそれがなぜ特別なのかを読み取ればよい。

傍線部に「その」とあることから、まずは指示先を考えると、「老年」の「特権」を指していることがわかる。つまり、近代化に伴い「老年の尊重」なる伝統が風化してきたという文脈において、かつては老年の何が特別であったのかを考えればよいということになる。本文には「古い巷の路頭に鳥籠を掲げて終日悠然と坐り込む老人の姿は、壮年たちの往来の中でいかにも所を得て、どうかすると往来の中心のようにも見えたものだ」とある。「壮年」が「往来」するとは、例えば生産者層として働いているということであり、「老年」が「往来の中心のように見え」というのは、そうして活躍する「壮年」たちを差し置いて尊重されているということである。これはまさしく「老年」が「壮年」に比して特別に扱われているということであり、「このことを

説明すれば解答となる。

**《解答要素》**

- ① 社会において労働力となり活躍する壮年たちよりも、
- ② すでに引退し何もせず過ごす老年が尊重され、特別に扱われているから。

**《参照箇所》**

- ① 第2段落3文目
- ② 第2段落2・3文目

**問 2**

**解答** 最先端の技術を追い求め、志向する近代的な先進都市では、老いた者はその進歩の速度に追行できず、人間も未成熟な状態であることが評価されるようになり、人は若く軽快で活動的に見られることを願うようになったということ。(104字)

**難易度** ★★☆☆☆

**設問パターン** 具体化型

**解答範囲** I (第1〜第4段落)

**解説**

「先進都市」を「小児化の翳」が覆うとはどういうことか、ここまでの本文の内容を中心に考察していく。

問1で確認したように、かつての社会では「老年の尊重」という文化があった。しかし、「老齢を置き残しがち」な近代では、「つねに先端のこと」が志向され、誰もが「近代化に頭を越され」てしまう。このように、近代とは常に古いものが新しいものに取り替えられ、「そもそも成熟というものはあり得ないのではないか」というような状態である。「このような風潮のなかで、

人間の「老若の価値観」も「大幅な逆転」をし、「近代化の波」は「老年の尊重」という「伝統風習をも空洞化し」て、「人は若くて軽快で活動的に見られること」を願うようになった、というのが第1～第4段落の内容である。ここで、老年の尊重という伝統風習の空洞化とは、第3段落の初めにあるように「老齢を置き残しがちである」近代の特徴の具体例の一つに過ぎない。要するに、技術の「先端」(新しさ)が志向されるようになるにつれ、若い者はその進歩についていけず、人間も若く新しい(未成熟な)状態が志向されるようになったということである。これを筆者は「小児化」と呼んでいるのであり、以上の内容をまとめれば解答を得る。

#### 《解答要素》

- ① 最先端の技術を追い求め、志向する近代的な先進都市では
- ② 若い者はその進歩の速度に追行できず
- ③ 人間も未成熟な状態であることが評価されるようになり
- ④ 人は若く軽快で活動的に見られることを願うようになったということ。

#### 《参照箇所》

- ① 第4段落2文目
- ② 第2段落2文目、第3段落1文目
- ③ 第4段落2文目、第2段落1文目
- ④ 第2段落1文目

#### 問3

#### 解答

科学技術の進歩により、さまざまな病気の療法や薬品の開発が進むことで幸運にも病から救われた人々が感じる、それらが開発されるまでのわずかな時間の差で生き永らえることができなかつた人々に対する

るうしろめたさ。(100字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 II (第5～第8段落、特に第5段落)

#### 解説

誰が何に対してうしろめたいと思っているのかに着目して考えよう。

第5段落は近代化に伴う「疾病の克服」についての話題である。「科学技術の進歩」により、「療法あるいは薬品の開発」が進んだ結果、人類はさまざまな病を克服した。そうすると、そのような病から救われた人々で、「もしもあの病気がもう五年、あるいはもう三年、早い時期のことであつたら、自分の寿命はとうに尽きていたところだった」と感じる人も少なくないだろうと筆者はいう。このような人々は、「時間の断層があつたような、うしろめたさを覚えるかもしれない」というのが傍線部の内容である。「科学技術の進歩」によりほんの少し前であれば救われない病から救われた人々が感じる「時間の断層」とは、当然救われた自分と救われなかつた過去の死人との間にあるもので、このようにわずかな時間の差で過去に多くの人が救われなかつた病から自分は救われてしまったという申し訳なき、これが「うしろめたさ」の正体である。以上の内容をまとめれば解答を得る。

#### 《解答要素》

- ① 科学技術の進歩により、さまざまな病気の療法や薬品の開発が進むことで
- ② 幸運にも病から救われた人々が感じる、
- ③ それらが開発されるまでのわずかな時間の差で生き永らえることができなかつた人々に対するうしろめたさ

## 《参考箇所》

- ① 第5段落3文目
- ② 第5段落2～4文目
- ③ 第5段落2～4文目

## 問4

**解答** 近代の科学的な世界観に即して考える人間（19字）

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 特殊型

解答範囲 II（第5～第8段落、特に第7・第8段落）

**解説**

本文において「近代」とはどのような時代であると述べられているかを踏まえて考えよう。

問2で確認したように、近代では、「つねに先端のこと」が志向され、結局誰もが「近代化に頭を越され」てしまう。このような風潮の根源は「科学技術の進歩」にあり、これにより「先端的な職種」（第3段落）が生まれ、また「疾病の克服」（第5段落）もなされたのである。このように「科学技術」が台頭する世の中では、「科学技術」にもとづく考え方が主流となる。その一端が最初に述べた「つねに先端のこと」が志向される風潮であり、第4段落で述べられている『『不老』の顔』である。第7段落における『『不死』の相貌』もこれに対応しており、「その相貌とまともに向かいあった人間をそのつど、あたかも不死のような感覚の中に凝固させる」とは、結局のところ第4段落で述べられているように、「近代」とは「成熟」のない、常に新しいもののではないかと人々に思わせるといふことである。

以上を踏まえて傍線部を見てみると、「近代に睨まれた人間」とある。こ

の「睨まれる」という擬人化表現を具体的に言い換えている部分を傍線部付近から探していく。また、「近代に睨まれる」とは「近代特有の考え方に縛られる」というような意味だと考えられる。そして、人間にこのような世界観を植えつけたのは先に述べた通り「科学技術」にほかならず、このように考えると、第8段落にある「近代の科学的な世界観に即して考える人間」という表現が傍線部の言い換えとしてふさわしいことに納得できるだろう。このような設問においては、まずは傍線部付近を探してみることが定石である。

## 問5

**解答** 先進近代社会を生きる人間は、科学的な世界観にもとぎ魂の不死と

いう観念を排除し、そのようなものに頼ることなく社会を営んできたということ。（68字）

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 具体化型+指示語説明型

解答範囲 III（第9～第12段落、特に第9・第10段落）

**解説**

傍線部における「清算」とはどういうことか、前後の内容を踏まえながら考えていこう。

第8段落では「魂という観念」について述べられ、人は「魂という観念なし」に「自分を自分として捉えられる」のか「かならずしも明快に答えられるものではない」く、「科学的な世界観」が台頭する近代社会でも「魂という観念」は人間の生にとって不可欠かもしれないということが示唆される。そして第9段落では、「魂という観念」に含まれる「不死という観念」について述べられ、「この不死という観念がまた人間およびその社会にとって、何

らかの形で、不可欠なものであるのか」という議論に入る。この後の「しかし果たして不死の観念をまったく欠いて、人間の社会は『建設的』たり得るか」「あらゆる構築には、スクラップ・エンド・ビルドの形を取るとしても、永続という観念がその底にひそんでいると思われる」といった部分から、筆者は結局「不死の観念」もまた不可欠であると言いたいのであり、それが「人の意識の中心から断念排除」されたように思われても、実は「永続という観念」に姿を変え、「さまざまな事物や営為の底へ入り込」んでいるというのである。このような文脈を踏まえたうえで、傍線部「そんなものはとうに清算して、やって来たではないか」をみていくと、「そんなもの」というのは「不死の観念」のことであり、それを「清算」するとは「科学的な世界観」のもとで「断念排除」することで、「やって来た」というのは「人間の社会」を「構築」してきたということに他ならない。以上の内容をまとめれば解答を得る。

### 《解答要素》

- ① 先進近代社会を生きる人間は、科学的な世界観にもとづき魂の不死という観念を排除し
- ② そのようなもの(魂の不死という観念)に頼ることなく社会を営んできたということ

### 《参考箇所》

- ① 第10段落1文目、第9段落5～7文目
- ② 第9段落5～7文目

### 問6

**解答** 科学技術は、限定された領域の中での追及を繰り返し発展していくも

のであり、個々の技術は短期間のうちに更新されていく本来有限かつ相対的なものである点と、一方でその限定の更新と展開の無限性からあたかも永続するものかのように考えられていることが矛盾している。(127字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅲ(第9～第12段落、特に第11・第12段落)

### 解説

ある程度、科学技術についての教養が要求される設問であった。本文ではやや婉曲的な表現がなされているので、結局どういうことなのか考えながら読み進めていこう。

第9・第10段落では、「清算」されたかのように思われる「不死の観念」が、実は「永続という観念」に姿を変え「さまざまな事物や営為の底へ入り込む」ということが述べられた。そして、第10段落最終文における「現実主義の支配のもとで、不死の観念はどこへ潜り込んだのか」という問いに、第11段落冒頭で「広い意味での科学技術の中へではないか」と答えられるのである。傍線部では、このことに対して「矛盾がある」と述べられるのだが、それはいったいなせだろうか。傍線部以後を読み進めていくと、科学技術は「究極の作動主である一者」(例えば神のような)を排除し、「無差異、等質あるいは無質の場において、無限の測量と試論を、無限追求を可能とした」とある。そして、「さまざまな定理が認定された」のだけれども、それらは「限定された領域」において「不変」であっても、大域的には「限定の改変」により「その定理を覆す新定理が考察される」のである(「限定の改変」という部分がわかりにくいかもしれない。科学においては実験により得られた結果などから現象や物質の構造を予測して、それに基づき理論を構成し定理

を得る。しかし、新たな実験結果によりその予測の部分的な間違いが見つかる場合もあり得るわけで、その際には予測を修正し、新たに定理を得るのであるが、筆者はこれを「限定の改変」と言っているのだらう。

このような科学技術の「展開」「更新」において、「個々の技術は短期間に超えられ、わずかの後世からも、どうかすると現実離れたもののように、まるで異なった原理に属するもののように振り返られ」、結局どんな「定理」や「技術」も「有限で相対的なもの」であると述べられる。「にもかかわらず、それぞれ有限なはずの追求が、その限定の更新のはてしなき、展開の無性により、不死のごとき相貌を帯びるに至っているのではないか」というのが本文の結末であり、本設問において問われている内容である。まとめれば、科学技術というものは、ある「限定」のもとで「有限」の(すなわち近い未来超えられるであろう)「追求」として発展していくもので、部分的にみると「不死」ではないのだが、ただその「有限のはずの追求」の「限定の更新」と「技術の自己展開」がはてしなく続くことにより、あたかも科学は「不死」であり、「永続」するかのようになっているということである。これが問われている矛盾している内容であり、以上の内容を本文の語句を使ってまとめれば解答を得る。

《解答要素》

- ① 科学技術は、限定された領域の中での追及を繰り返し発展していくもの
- ② 個々の技術は短期間のうちに更新されていく本来有限かつ相対的なものである
- ③ 科学技術の限定の更新と展開の無限性
- ④ (③から) 科学技術はあたかも永続するものかのようになっている
- ⑤ ①②と③④が矛盾している

《参考箇所》

- ① 第11段落4～7文目
- ② 第11段落10～12文目
- ③ 第11段落8～11文目
- ④ 第12段落1文目
- ⑤ なし

問7

- 解答 ① 悠然 ② 虐殺 ③ 累々 ④ 穩当 ⑤ 干涉

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

比較的平易な⑤の「干涉」を除けば、書ける人には書けるような適度に難しい漢字が出題されており、差がつく問題である。①～③のような漢字は日常的に書くことはほとんどなく、漢字の学習において実際に書くということをおろそかにしていると、本番で手が止まってしまうことになるだらう。①の「悠」の字は「悠久」「悠長」といった熟語での出題も考えられる。また、②の「虐」の字については「虐待」「残虐」「自虐」、③の「累」の字については「累積」といった熟語も書けるようにしておきたい。

(島田了輔、正木僚、井小路馨、丸岡賢人)